

魔法の Wallet プロジェクト 活動報告書

報告者氏名：櫻井晃司 所属：大阪府立羽曳野支援学校 記録日：2020年2月25日（火）

キーワード：緘黙、コミュニケーション、表現、学習支援、自信、見通し

【対象児の情報】

- ・ 学年
小学6年生の女児
- ・ 障害名
自閉スペクトラム症
- ・ 障害と困難の内容

羽曳野支援学校は、病弱の特別支援学校である。学校隣接の大阪はびきの医療センターに入院している小中学生が通う本校と大阪府内の6つの病院（大阪急性期総合医療センター、大阪労災病院、近畿大学病院、堺咲花病院、大阪母子医療センター、阪南病院）内にある院内学級と6つの病院以外に入院している小中学生のための訪問教育がある。本児童は、阪南病院に入院している。

生育歴

- ・ 小3までは周囲の理解もあり、対人トラブルが少ない状況で過ごしていた。
- ・ 小4になり家庭の都合により大阪に転居した。
- ・ 新しい学校では新たに友人関係を構築することが難しく孤立した。
- ・ 担任に相談はしてみたものの解決には至らなかった。
- ・ そこから学校内で他者との会話が少なくなり、緘黙状態での生活が続いた。
- ・ 小5、10月に阪南病院に入院したため本校に転入した。

【活動目的】

- ・ 当初のねらい

- I. 自分の気持ちを発信することのできる対象を増やす。
- II. 継続的に学習することで、自尊心を高めることができる。
- III. 活動の取組を表や図で伝えることで、見通しを持って学校生活を送ることができる。

- ・ 実施期間

令和元年6月13日（木）～令和2年3月13日（金）

- ・ 実施者

櫻井晃司

- ・ 実施者と対象児の関係

小学部副担任

【活動内容と対象児童の変化】

◇対象児の事前の状況

学習面

- ・ 中学年後半から学習が難しいと感じるようになったようである。
- ・ 本校ではまず、国語は低学年のひらがな、カタカナから学習を始めた。その際にカタカナの定着に不安があり教員に幾度も確認したり鏡文字で書いたりすることがあったのでプリントやカタカナアプリを通じて幾度か復習をした。
- ・ 漢字をたくさん書きたい気持ちをもっているが、漢字を書くだけでは覚えたり利用したりすることは難しい。漢字を覚えても、実際に文章中で使うことが難しいため小学校1年生の範囲からやり直した。
- ・ 漢字を覚えても意味が解らず文章中で使えなかったり漢字の形を捉えるのが難しく鏡文字になったりすることがある。
- ・ 算数も低学年のものから始めた。文章読解が難しかったが、教員と読み取るポイントを一緒に確認することで、問題を解くことができるようになってきている。
- ・ 現在は低学年のものから始め、現在は4・5年の内容を重点的に行っている。
- ・ 自分の習熟状況を数字で評価されることに抵抗がある。
- ・ 国語・算数においても当該学年の学習をしたいという思いを強く持っている。

体調面

入院前

- ・ 家庭内ではコミュニケーションを取ることができていた。
- ・ 学校での不安（友人や教員との関係性、学習について）などは家庭でも打ち明けることができずにいた。そのためストレスが徐々にたまっていった。
- ・ そのストレスにより、家庭内での暴言暴力が頻回となった。

入院後

- ・ 少しずつ気持ちが回復し、精神的にも安定してきた。
- ・ 2週間に1回程度は家庭へ帰り、家族と関わる時間を設けている。
- ・ 精神的に安定してきたため、家庭内での暴言暴力もなくなってきている。

コミュニケーション面

- ・ 以下の3つがきっかけで対人トラブルが多い。

- ①自分の気持ちを言語化することが難しい。
- ②こだわりが強く、自分のルールで行動している。
- ③相手の顔色を見て気持ちを読み取ることが難しい。

- ・ 誰かとながっていたいという気持ちを強く持っている。
- ・ 入院以前は友だちや前籍校の教員との関係がうまくいかず、関わるのは家族のみという状況が続いていたが、入院し環境が大きく変化したことにより、本校教員、看護師、同年代の友だちなどさまざまな人と関わる機会ができた。
- ・ 入院後は大人や教員とは徐々に関わりをもち、会話ができるようになってきている。
- ・ 小集団の前であっても自分の考えや気持ちを周囲に知られることに強い抵抗感をもっているため、あいさつや返答が難しい状態である。

- ・入院して同年代の友人ができたことをきっかけに、自分の考えを周囲に理解してほしいという感情が芽生えてきている。しかし、どのように他人と関わってよいのかがわからず困っている様子が見られる。
- ・今までは活動する際に大人数であったり、カメラに映らなくてはいけなかったりすると教室へ入りにくいことがあった。

◇活動の具体的内容

I. 自分の気持ちを発信することのできる対象を増やす

A. 話す相手を増やすために

- ・アプリ「class Timetable」の使用

テレビ会議の参加が初めてのため、緊張しないように、進行や内容等を伝えるために使用した。見通しが持ちやすくなり、第一目標「教室に入ること」というのは達成できた。カメラに自分の顔が映ることを強く拒む様子が見られた。そのため本人が紙に名前や好きなものを書き、それを教員が読むという形で交流することができた。交流後、教員と1対1の振り返りでは「次は声を出したりタブレットを使って相手に伝えたりできたらいいな」という前向きな意見を聞くことができた。

「class Timetable」を見て行動することが身につきはじめ、自分で時間割表をチェックして持ち物をそろえたり授業の流れに不安があれば進んで質問したりすることができるようになってきた。



1日の流れを確認

- ・アプリ「Reco Emo」「3秒日記」の使用

1日の振り返りをするために使用。担任以外にも振り返りを見て欲しい気持ちが芽生えてきている。また、話す場を設けることで気付いたことや感じたことを第三者に言う事ができた。



- ・アプリ「zoom」の使用

校外学習の前に、一緒に行く堺咲花病院分教室と交流をした。初めは教室へ入ることも拒む姿があったが「ロイノート」を使って交流の流れを確認したり自分の姿がどのように映るのか確認したりした。初めての取り組みということで映るのは抵抗があり、教員に隠れて会話も教員が代弁することで交流することができた。校外学習の振り返りでは一連の流れがわかっていたので顔は隠さずに交流することができた。

校内でのクイズ大会では全分教室と交流するという事でその人数の多さに驚き、話すことはできなかったが、教室に入ってその場にいることはできた。その後にあった学習発表会の交流ではスムーズに教室に入り、その場にいながら交流中に思ったことを近くの教員に進んで話す姿が見られた。

その他にも教員だけでなく、病院の看護師、友だちとも交流をした。日常生活では話せないことや想いを伝えることができ、楽しみながら1歩前進する姿が見られた。

当初は写真やテレビ会議通信に映ることが難しかったが、今では友だちと楽しそうに映ることができるまでに成長している。



Zoomでの交流
友だちと楽しそうにテレビ会議通信をする姿

イ. 発話を促すために

・「ペチャット」というツールの使用

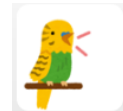
親しみのあるぬいぐるみに取り付け、話をするきっかけを作ったり練習をしたりした。尚、「ペチャット」はぬいぐるみの見えない部分に取り付け、ぬいぐるみと話しているというリアリティを出すことで会話を成立させようとした。「親しみのあるぬいぐるみと会話する」ということに戸惑いと喜びを見せながら楽しんで会話する姿が見られた。



お気に入りのぬいぐるみとお話

・アプリ「しゃべれる君」「棒読み」の使用

「しゃべれる君」で iPad のイラストのアイコンを押すことで声を出さずにコミュニケーションが取ることができ、会話や発表に前向きになることができた。今では、少しずつそのツールがなくても勇気を出して返事や発表などをする姿が見られてきている。「しゃべれる君」にはないことを伝えたいときに「棒読み」を使った。少しずつ他児と関わる事ができるようになってきたがまだまだ自分から発話することが難しいときに「棒読み」に自分の想いや考えを打ち込み伝えることをした。実際に小学部での集まり時にこれを使うことで本児の想いが他児に伝わった。伝わったときは照れる姿があった。



(´ω´)
棒読み

・アプリ「ロイロノート」の使用

「ロイロノート」を使って、授業の発表時に使用した。これを行うことで自分の想いや考えを他者に伝えることができた。情報モラルの授業では付箋機能を使ってリアルタイムで教員や他児と SNS 体験をし、さまざまな人との関わりをもつことができた。また、予め授業の流れを見て確認することでみんなの前で自己紹介や「なんでもバスケット」などのゲームに参加することができた。



以上のような支援を行うことで現在ではツールを使って他児と関わる事に面倒さを感じるようになり、少しずつ自分の言葉で相手とやり取りができてきた。また、声を出す練習をしたりどのタイミングで声を出すか確認したりすることで出席確認のときに「はい！」と返事ができるようになった。音楽の時間には歌唱をしたり自立活動ではカラオケにも参加したりすることもできてきた。カラオケは初めは独りだけでしていたが、最近では大勢に混じって歌う姿も見られる。日常で授業に遅れた際には「遅れてすみません」と言い、積極性が見られるようになった。



カラオケをしています

II. 継続的に学習することで、自尊心を高めることができる

継続的に学習することで、自尊心を高めるために

・アプリ「デイジーポッド」の使用

本児は自分で音読することに抵抗があり、教員が読むこともするが、通常教室での学習状況と同じようにしたいと思い、「デイジーポッド」を通じて音声を聞くことができるようにしている。耳から情報を得ることで黙読だけでは捉えることができない漢字の読み方の理解にもつながっている。また、転学した際の大人数で授業を受けるイメージにもつながっている。本児もこの取組みで教員とマンツーマンの授業とは違う感覚で興味をもって学習できている。実際、3学期から6年生が増え、はじめは抵抗もあったが一緒に学習することのよさに気が付くことができるようになってきて意欲的になってきた。その甲斐あり、学習に進んで取り組む姿が見られる。



・「NHK for school」の使用

社会では「NHK for school」で社会の内容に関する映像で歴史を学習している。歴史的人物がしたこと、エピソードをコンテンツ内の映像や電子黒板を用いて学習した。電子黒板では、はじめに先生モードで授業を実施し、定着したかは子どもモードを用いて確認した。ひとつのアプリ内で完結しているのも、最初に視聴した映像や画像が、電子黒板や問題内でも使用されており、説明されたことと、問題で提示されているものを関連して考えやすい構成となっている。学習の際に歴史的人物が取り組んだことや特徴から感想を吐いたり疑問に思うところがあれば質問したりする姿が見られた。さまざまな方法で学習することで理解が深まり、学習への意欲が高まった。

NHK
for
School



・アプリ「ビノバ」の使用

「ビノバ」は各教科あり、1問1答でクイズのようになっている。それを使って学習の定着を確かめた。クリアすると隠しキャラが手に入るの「すごいモンスターが出てきた。次はどんなモンスターだろう」と言って楽しみながら学習に臨むことができた。また同時に「できる」、「わかる」が増え、自信につながった。

III. 活動の取組を表や図で伝えることで、見通しを持って学校生活を送ることができる。

見通しをもって学校生活を送ることができるように

・「ロイロノート」の使用

事前に本時の流れを確認し、それをもとに授業の流れを「ロイロノート」で示した。事前に作っておいた型に本児と一緒に矢印をつなぎ合わせて確認し、疑問に思ったことを質問する時間をつくることで、いつもは参加できない体育のドッジボールにも他の児童や教員と一緒に参加することができた。

バスケットボールの時にも流れを確認することに使用した。人前でのプレーは苦手だが、チーム戦の大切さを伝え、ロイロノートで自分がどんな動きをすることが望ましいのか提示することで、安心してプレーに参加することができた。

日常生活で友だちと上手くいかない際に経緯を整理するためにロイロノートを使用することで相手の気持ちや自分の想いを整理することができ、和解につなげることができた。



・「palstep」の使用

授業の進捗を確認でき、目標までの自分のがんばることを見える化することで達成に向けて行動できた。また、今まで取り組んできたことを振り返ることもでき、自信につなげることができた。



・アプリ「Onions」の使用

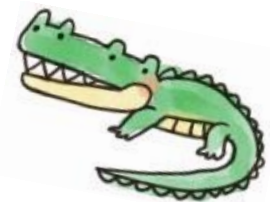
体育の時に、自分のパスやシュートする姿を撮影し、繰り返し見て確認したり、調べた見本を見たりして使用。フォームの改善に気づき自信につなげることができた。



◇主観的気づき

- ①自分の気持ちを発信することのできる対象を増やすために、テレビ会議通信を通じて人と関わる事に興味を示し、人前に出て活動できるようになってきた。
- ②継続的な学習をすることで、自尊心が高まってきた。
- ③活動の取組を表や図で伝えることで、見通しをもって学校生活を送ることができるようになった。同時に積極的な発言が増えた。

さまざまな支援の他に「輪になるシート」を用いて目標を可視化した。目標に向かって教員と試行錯誤する中で最終的に入院当初より伸びたものが概ねであった。成長した自分を目の当たりにし、項目を一つひとつ確認することで振り返る事ができ、同時に喜ぶ姿があった。



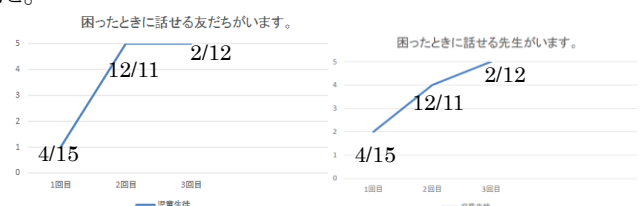
「輪になるシート」とは・・・

「こころの病院のある子」を対象にしたアセスメントシートです。単なるアセスメントシートとしての使用に留まらず、子どもが「輪になるシート」で自分自身をチェックして目標設定したり、子どもをよく知る保護者・地域校担任に使用してもらって、子どもの教育的ニーズを可視化して共有したりすることを狙っている。

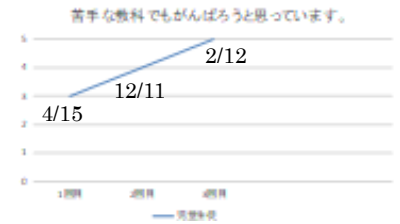
平成30年度、刀根山支援学校と共同で作成した。(国立特別支援教育研究所の「Co-MaMe」、埼玉県立けやき支援学校の「自分メーター」を基に作成)

◇気づきに関するエビデンス

①テレビ会議通信を通じて人と関わる事に興味を示し、人前に出て活動できるようになってきた。また、他児と関わる機会が増え、人と関わることに前向きになった。



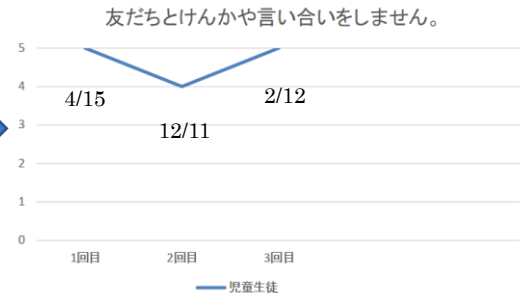
②継続的な学習をすることで「学習」が理解できたり楽しさに気が付くことができたりして、自尊心が高まってきた。



③活動の取組を表や図で伝えることで、学校生活で積極的な発言が増えてきた。また、自ら進んで準備、行動をすることができるようになってきた。1年を振り返りながらこの「輪になるシート」を計測した。そのときの表情は自信に満ち溢れていた。



上記のものは向上するものだけでなく、平行線のものや下がってしまうものもある。左下記は2学期に実施し下がってしまったものである。結果は下がっているものの、今までは「どうせ私が悪いんでしょ」と言っていたけんかにまで発展せず拗ねる様子だったが、話すことができる対象が増えてきたためこの結果となった。しかし、振り返りを通して適切な人間関係を築けるように、教員と一緒にその方法を考えて身に付けることができるように支援していくことで3学期の結果は右下記のようになった。



これは2学期末にとったもので、友だちとうまくいかないことがあった。

3学期末に再度計測してみるとグラフが上向しており、本児も人との付き合い方が随分うまくなったことを自画自賛していた。

◇その他のエピソード

①3学期になり、一緒に学習する仲間が増えたことによって初めは抵抗があったが少しずつ気持ちに変化が現れ、「タブレット端末はもういい」と言って、自分から作業したり発言したり、話し合いに参加したりし、学習に切磋琢磨する姿が見られるようになった。次第に表情もよくなり、人とのコミュニケーションの取り方がうまくなってきた。

②様々なツールを用いて学習することで「早く6年生の学習がしたい」という前向きな発言が見られた。また、ビノバを使い、「すごいモンスターが出てきた。次はどんなモンスターだろう」と言って、楽しみながら進んで学習する姿が見られた。そのリズムが身につきはじめ、自分から進んでタブレット端末を取り出し、課題を行う姿が見られた。また、6年生が増え、一緒に学習する楽しみはもちろん難しさも感じるできるようになった。以前までは理解しにくい課題があれば落ち込んでしまい「もうやりたくない」と言って動かず、教員の説得が必要だったが今では難しい課題があっても進んで「考える」ことができるようになった。最終的には、学習の積み重ねができてきて、自信もつきはじめ、「学習時間が短い」と言うようになるなど、学習に前向きな姿が見られる。今まで受け身だったが問題を自ら解く姿が見られるようになった。

③話を一方的に聞くだけでなく、「これってこういうこと?」「私は〇〇だと思う」など、思ったことは発言することができ、双方向のコミュニケーションが増えた。最近では自分で時間割表をチェックして持ち物をそろえたり授業の流れに不安があれば進んで質問したりすることができるようになってきた。

【1年を通して】



同じ空間で学習できるよう
なってきました。



修学旅行で初めて会
う友だちと楽しむこ
とができました。



本児は当病院に1年余り入院し、はじめはできなかったことが今ではできるようになり、本人自身も喜びと驚きがある。春からの進学先が決まり、教員と学校のホームページを観たり、小学校と中学校の違いを学習したりした。その後、保護者と学校見学へ行った。担任になる先生ともうまく会話することができ、本児としてもこの経験が自信につながったようで楽しそうに話をしてくれた。気持ちも新たに羽曳野支援学校で学んだことを進学先、そして将来に活かしてもらえたらと思う。